まちづくりひろしま

被爆１００年(西暦2045年)の姿をめざして

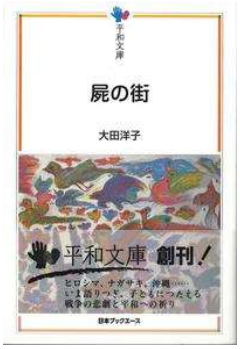
第６８号（令和５年11月１５日）
読者数：６７１名（募集中）
ﾒｰﾙ:hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp
HP:https://machizukurihiroshima.web.fc2.com/index.htm
〒733-0002　広島市西区楠木町1-9-7
発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二
配信元：広島アイデアコンペ実行委員会
ご提案・ご意見等は、こちらまで

世界の隅々に平和を！平和を我らに！

○広島市街地の全景
（広島市のHPより）

○座談会：ひろしまのまちづくり

○広島中央公園イメージ図
（NTT都市開発HPより）



○本の紹介：屍の街

目　次

○巻頭言：ひろしまの「まちづくり」のこれからを大きく掴む
中国セントラルコンサルタント代表　前岡智之
○ひろしまのまちづくりの動き
・広島市中央公園の10年間の変遷を振り返る
○座談会：テーマ「ひろしまのまちづくり」
○ほっとコーナー：世界を良くするのはコミュニティ……空手道真義館　竹内大策
○広島の復興の軌跡・人物編……編集委員　石丸紀興
○特別寄稿：「住民訴訟」に取り組んで……前広島市議会議員　馬庭 恭子
○メルマガ「まちづくりひろしま」を総括する
○ＨＡＣＫ便り：これまで、そしてこれから…… ＨＡＣＫ代表　桧山　渉
○本の紹介：「屍の街」　著者　大田洋子
○読者からの投稿：第67号を読んで思ったこと……中建日報　野村正範
○編集後記：メルマガの編集に携わって…… 編集委員　瀧口信二

□ 巻頭言

ひろしまの「まちづくり」のこれからを大きく掴む

中国セントラルコンサルタント代表　前岡智之

まちづくりとは

「まちづくり」という言葉が登場したのは1952年に発行された「都市問題」という雑誌で初めて使われた言葉です。「まちづくり」とは、自治体などが市街地そのものを作る「都市計画」のことではありません。しかし「まちづくり」の目標を、「身近な居住環境を改善」し、「地域の魅力や活力を高める」とすれば、「都市計画」の目指す方針や計画的な行動を共有することが不可欠となります。

「まちづくり」は、地域社会に存在している施設や建物などの資源をできるだけ活用する形で進められます。また、自治体だけでなく、さまざまな機関や団体、住民などが連携や協力をし合って進めるのも特徴です。

「まちづくり」は、長い年月をかけ、街そのものを作り出すことを表す言葉から徐々に意味を広げています。ハード面の整備だけでなく、空間や環境の整備、ルール作り、イベントや生業の整備、人と人とのコミュニケーションづくりなど、豊かな生活をするうえで必要な整備を全て網羅します。

広島市は、戦災復興都市計画を策定し、広島平和記念都市建設法の制定を実現させ、市民の英知と努力、国内外からの温かい援助などにより、めざましい復興を遂げ「まちづくり」の最高目標となる都市像に「国際平和文化都市」を掲げています。

また、国レベルの国土開発計画の変化を背景として第６次基本構想・基本計画を策定し、現在に至っています。中でも特筆されるのは、地域コミュニティの活力低下や地域を支える人材の不足、相互扶助や福祉、防犯といった機能の低下に加えて多様化する市民の価値観やライフスタイル、地域の生活課題について言及しています。

こうした課題の解決に向けて地域コミュニティによるエリアマネジメントを推進するため、町内会・自治会等が地域のにぎわいづくりや活動団体の財源確保に公有財産等を活用することができる仕組みを整備するとしていることが特筆されます。

広島中央公園グランドデザインを求めて

この地に生まれ、育ち、学び、多くの恩人に支えられて友人や仲間と共に広島の「まちづくり」について考える場を求め続けて半世紀になります。

私たちは、市民球場跡地も含む広島中央公園グランドデザインを求めて市民コンペを進めることとしました。そしてコンペを締め、次に自分たちも課題に取り組むこととしました。

手掛かりは、丹下健三氏の戦災復興都市計画、平和記念公園コンペティションとその後に提出された第８回 CIAM―1951 報告（テーマは都市のコア）の「広島計画」です。丹下氏は､戦災復興都市計画で地政的な広島の川と海のつながりを意識し、これに都市のエリアを配置しました。

また「広島計画」では、平和公園から広島中央公園全体を都市のコアと位置付け、その条件として、「私たちがそこで生活している開いた社会において失われたコアを取り戻す方法を探求し、市民の肉体と精神を培う場として建設していくことである。」としています。

これらを良しとすれば、現状はあまりにも問題点が多くあり、将来を見据えて**ひろしましみんひろば「広島中央公園のグランドデザイン」**が必要と考えたのです。

メルマガ「まちづくりひろしま」の発行

「広島中央公園アイデアコンペ」や「広島中央公園のグランドデザイン」に引続き発行するこの「まちづくりひろしま」は、今、動いているひろしまの内容をより多くの市民に知っていただき、考える場を提供し、実感をもってまちづくりに参加する一助となることを願っています。

このレポートは、市民による、市民のためのひろしまに再生する第一歩として、無関心が関心に変わることを願って、たくさんの市民に目を通していただけることを目標としています。

また、自らまちづくりに提案を続ける人達に、まちづくりに関心をもつ市民がたくさん存在することをお知らせする役割も併せ持っています。

希望を持ち続けることができる広島の目指すべきまちづくりへの提案

◆時代的な変遷やその時々の政策・戦略が変わろうとも絶えず変わらない広島の21世紀の持続可能で賢明な成長をめざす広島の都市と農村と瀬戸内海の**新しい地政学的な条件**を提示してお

きたい。ここでいう**地政学**とは、「国力の源泉である自然地理的環境と国家形成の関係」といえる。広島の力の源泉である**自然地理的環境**とは、「市街地を取り囲む山、市街地を流れる六つの川と広島湾から瀬戸内海に広がるかかわり」であり、この環境は都市の気の流れを持ち続けている。

（広島市ホームページより）

被爆のあと平和国際都市をめざした復興都市計画においてもこの自然地理的環境を基盤として計画されている。

◆ひろしまの市民によるまちづくりの歴史、現在、そして希望をいつでも、だれでも、自由に手に取ることができる機能「**広島まちづくり博物館**」を提案する。

上海城市規画展示館

数年前になるが目を疑ったところは、中国の上海、人民広場、上海城市規画展示館（シャンハイじょうしきかくてんじかん）、地上 6 階、地下 2 階の建物で、上海の都市計画と発展に関する展示を行なっていた。

目玉は上海市街地全体をカバーした大型模型（写真）であり、そこには既存の建物と将来的に計画中の建物もある。他にも上海の歴史と都市計画に関する展示があり、外灘など特定の地域に限った小型模型もあった。また様々なジャンルに対応した一時展示のためのスペースもあった。

上海市街地全体をカバーした大型模型
（Wikipedia より抜粋）

上海市街地全体をカバーした大型模型を詳述すると中央部にゴーグルルームがあり、そこではゴーグルをつけて空中回遊ができる。しかも模型の上に将来の都市の姿が映像として映し出されるのだ。

社会的な違いはあれ、「広島まちづくり博物館」の事例と出会った。市民のコミュニティ活動の中で自分たちの地域の資源を見直し、身近な居住環境を改善し、「地域の魅力や活力を高める」計画を作り、ありのままの様子をここに展示し、お互いに語り合う時が一日も早く来ることを願っている。

ひろしまのまちづくりの動き

① 広島市中央公園の 10 年間の変遷を振り返る！

（NTT 都市開発の HP より）

広島のまちづくりの動きとしてトピックスを紹介してきたが、今号はメルマガのメインテーマでもあった中央公園の動きに絞って振り返ってみたい。

大きな動きとして、前半は**旧市民球場跡地の活用**があり、後半は**サッカースタジアムの建設**が飛び込み、更には**中央図書館等の移転**が進められている。

前秋葉市長時代の後期、市民球場の移転が決まり、跡地活用案について市民から公募したり、民間事業者を募って事業コンペを実施。最優秀案がなく折衷案を決定したが、不評。

2011 年に現松井市長が誕生し、「若者が集い賑わう場」として再検討することとなる。旧市民球場跡地委員会を設置し、有識者や市民等が議論して 2013 年に活用案を決定。

同じ頃、県、市、商工会議所、サッカー協会によるサッカースタジアム検討協議会を立ち上げ、建設場所等の検討を開始。2014 年、球場跡地とみなと公園がサッカー場の建設候補地に上がったため、球場跡地の整備の動きはとん挫。仮囲いを残したまま公園として一般開放。

2015 年、みなと公園が優位と決定したが、交通渋滞を懸念する周りの倉庫業者からの反対とサンフレッチェ広島会長から球場跡地でなければ動かないという横やりが入る。

協議の結果、2019 年に第 3 の候補地中央公園自由・芝生広場に決定。2021 年に設計・施工一括発注方式で請負業者（大成建設 JV）を決定。2022 年に着工し、2024 年 2 月の開業予定。

同時期に旧市民球場跡地はパーク PFI を導入。2021 年に民間事業者（NTT 都市開発 JV）を決定し、今年 3 月開業。サッカー場周りの広場も同じ手法で来年の開業予定。

一方、2022 年に中央図書館等の移転話が急浮上し、十分な議論もなされぬまま広島駅前の百貨店の上層階に移転を決め、現在設計中である。

従来の中央公園のビジョンも顧みず、場当たり的に対応している姿を見ると広島市民として恥ずかしくなる。行政はもっとプライドを持って取り組まなければならない。

○座談会

テーマ：ひろしまのまちづくり

出席者：石丸紀興（編集委員）、**前岡智之**（編集委員）、**松波龍一**（松波計画研究所）
若本修治（ダブルスネットワーク代表）、記録：**瀧口信二**（編集委員）

・日時：2023 年 10 月 11 日（水）15:00～17:00
・場所：中国セントラルコンサルタント会議室

（前置き）

今号でメルマガを休止するにあたり、メルマガに多数寄稿いただいた松波さんと若本さんに参加いただき、ひろしまのまちづくりについて忌憚のない意見交換を行う。

前岡：広島のまちの動きを市民にもっと知ってもらいたいとの思いでメルマガを配信してきたが、今日はひろしまのまちのこれまで、そしてこれからどうすべきかについて気軽に議論してほしい。

―平和大通りについて―

石丸：1979 年（昭和 54 年）1 月 31 日の中国新聞に平和大通りをテーマにした座談会「**丹下構想をどう生かす**」が掲載され、市助役や丹下研究所の計画部長と共に前岡さんも登場。

当時の荒木市長時代の都市の歴史と文化・緑を大事にする施策を反映した画期的な座談会と高く評価。ただ、平和大通りのイメージ図を見ると、名古屋や札幌の大通り公園と同じように道路を分離して中央部を公園にしている点と東端に市民文化総合センターを配置している点に疑問を持つ。

前岡：当時、広島駅前の再開発計画と段原再開発計画に関わっており、座談会の声がかかったものと思う。平和記念都市建設法制定 30 周年を記念して広島市が丹下研に委託して「**広島国際平和文化都市基本構想**」をまとめた。その構想をベースに議論している。

丹下の軸線は東西軸と南北軸の十文字として捉えられているが、**広島の地政学**からすると山から川に流れてデルタを通って海に出る、風水でいう気の流れは南北軸が主であり、東西の平和大通りは都市活動のための位置づけだったのではないか。

平和大通りは道路法に基づく道路として計画されたものであるが、丹下構想の大通り公園方式は交通量配分が少ないことを前提に提案したのではないか？

松波：大通り公園ではなく中央に道路を通している現状は川の多い広島では妥当と思う。カープの優勝パレードやフラワーフェスティバルができるのも中央方式だからこそであり、広島の特徴とポジティブに捉えたい。平和大通りを賑わいづくりのために道路法から外して都市公園にしようという動きがあるが、疑問である。今のままで何が不都合なのか。緑地帯をビジネススペースと考える必要はない。賑わいは結果であって、目標とすべきではないと思う。

若本：市内への車の進入を減らすためにも、平和大通りや城北通りに路面電車を走らせて市内を循環できるようにしてはどうか。**楕円のまちづくり構想**にもフィットする。

比治山には平和大通り側にケーブルカー（みどり坂で廃止されるスカイレール活用等）を設ければ、平和大通りともつながるし、乗りながら市街地を一望出来て名所にもなる。

―中央公園について―

前岡:戦災復興計画において昭和 21 年に今の平和記念公園と中央公園一帯を公園区域として都市計画決定される。当時はまだ平和記念公園と指定されていなかったが、**広島のコア（聖域）**として位置づけられていたのではないか。

松波：旧市民球場の跡地利用の市民提案や事業者提案を並べて見たことがある。いろんなアイデアや示唆に富む提案が多く面白かったが、みんな敷地の中のことしか描いていない。

周りにすでにある都心機能と連携して、球場跡地に**新たなアクティビティ**が生まれる仕組みを考えるのが先決ではないか、跡地は原っぱのままでもよいのではないかと声を上げたが、あまり賛同を得られなかった。

現在、パーク PFI による賑わいづくりで、民間事業者が店舗や飲食店などを設置しているが、周辺の都心機能の更新意欲を阻害するのではないかと心配だ。公園側からはすでにある都心の賑わい資源を活用してそれらの価値を高め、都心側からは公園のオープンスペ

ースを**都市空間の魅力**として利用する、といったような一体化、連携への方策が本来求められているのではないか。

若本：みんなが利用する都市公園はそこに求められる複数の指標（KPI）を抽出し、最初の段階でその指標で達成される**都市の未来像**を示して、市民のコンセンサスを得たかった。何を誘致するか検討する際はその指標に照らして評価すべきだが、今は好きか嫌いか、声が大きいか否かで決めているのが実情である。結果、大多数の市民を置き去りにしている。

―神宮外苑の問題―

石丸：今、東京では明治神宮外苑の再開発が話題になっている。明治神宮の維持費を捻出するため老朽化した神宮球場等を順次建て替え、超高層ビル2棟などを建設予定。そのため「百年の森」として都民に親しまれている樹木を多数伐採して新たに植え替える計画。

それに対して超高層ビルによる景観悪化と樹木の保存を訴えて文化人や市民から反対運動が起きてマスコミにも大きく取り上げられている。

広島にも中央公園等の整備において似たような問題があるが、動きがない。

若本：広島はよく「札仙福」と比較され、経済活動やまちの活気が見劣りしているので、まちづくりの再開発や活性化等の経済投資を歓迎する向きがある。外苑問題のような反対の動きが弱いのはそのせいか。

―身近な問題からのアプローチ―

若本：長年、住宅設計のコンサルティングを営み、海外の事例も学び、日本の住宅で気づいたことは、日本では住宅取得のゴールは購入時だが、欧米では将来売却する時の販売価格である。その結果、日本では新築時がベストで、年と共に価値が下がり、最後は空き家となって処分されるケースが多い。一方、欧米では価値を高めるために適正な管理を行い、近隣を含めて**良好な住宅環境**を維持するために努力している。

また日本では郊外に開発された住宅団地も人口が急増して学校を増設するが、30年も経てば児童が減少して学校も統廃合されていく。行政のインフラ投資も含め**ゴールの設定**は目の前ではなく、今の選択が将来どのような影響を及ぼすかを熟慮して決定すべきである。

松波：広島の戦後の復興まちづくりは、**ビッグプロジェクト**の連続だった。構想された都市軸や都市構造のビジョンのもとで、太田川の河川改修、戦災復興区画整理、基町や段原地区の再開発、等々。この経験から、**都市づくり**というのは、確かな完成予想図にもとづいて、税金を投入して、一気に大規模に行うものだ、という感覚を広島は持ってしまったのではないか。実際には民間の小さな投資行動の積み重ねで都市はできていくのだが、それをうまく誘導・コントロールするという経験に乏しいのではないか。

だから、社会性のある**スモール・プロジェクト**の立ち上げや持続可能性への工夫といった地道な取り組みでなく、大きな構想を語るほうが大切でかっこいい、といった誤解が生まれているように思える。

前岡：地域の人たちと一緒に2年位かけて住宅の区画整理事業をやった経験がある。30名位の集合換地をしたところに企業を誘致してその利益を住民に還元したり、別の場所では住みやすい住環境にするため**建築協定**や**まちづくり指針**を作成した。

―今、訴えたいこと―

若本：日本が衰退しているのは中間層が疲弊しているからであり、多くの人はローンを借りて住宅を取得しているが、債務超過に陥っている。住宅・不動産の政策を見直し、時間と共に価値が目減りするのではなく、長い目で**資産価値**が保てるような環境を整えれば、個人も近隣住民も自治体も損をすることなく、誰もが住みたいと思えるまちづくりが可能ではないか。個人が所有する不動産が「含み資産」になるか「負動産」になるかの差は大きい。バブル時に一億総中流だと思ったのは、賃金よりも「含み資産効果」が大きかった。

松波：環境デザインで一番大事なのは**社会システム**をデザインすることであり、絵を描くことではない。先ほどの旧市民球場跡地に周りの都心機能からアクセスを誘導させる話も公園管理上は難しいかもしれないが、関係者による協定やルールを工夫することでその困難を回避できる。ハード面だけでなく**ソフトなデザイン**に対する信頼感を高めていく必要がある。

石丸：そのためにも企画の段階でいろいろな案を持ち寄って、構想同士で議論を戦わせる場がもっと必要ではないか。

海外からの研修生や訪問者に多い質問は「**広島はいかにして復興したのか**」である。それに答えられる人が少ないので、被爆体験伝承者のような復興歴史専門家を育成する必要があり、さらに広島の戦後復興の歴史を伝える**復興資料館**が欲しい。財産交換して市所有になった商工会議所ビルを４階に減築して入居させる案を推奨したい。

前岡：コミュニティや町内会単位で専門家を交えながら、住民が主体となって地域のまちづくりをまとめ、公民館等にいつでも見れるような場を設けてもらいたい。さらに地域単位の活動を市全域に展開し、行政には**広島まちづくり博物館**を設けて全体像が展示できる場を要望したい。

＊コメント＊

今日の話を聞いて住宅づくりとまちづくりの類似点に気がつく。どちらも目先の損得ではなく、将来の影響を熟慮して決定しなければいけないという重要な視点である。

一般的に我が家で過ごす以外、残りの時間は社会生活をするための建物や施設等の内部空間や外部空間で過ごしている。我が家のことは自分事として真剣に考えるが、公共建築や道路・河川・公園などの公共空間となると行政に一任する傾向がある。

まちづくりは市民が住み、生活する内・外部空間の身近な問題であり、もっと積極的に関わる必要がある。公共事業は市民の税金で執行され、市民は行政に注文を付ける権利があり、市民と行政は**対等の立場**であることを自覚したい。　（文責　編集委員　瀧口信二）

□ ほっとコーナー

世界を良くするのはコミュニティ

空手道真義館広島支部長　竹内大策

優しい風の吹く地球 2014.8.20 広島で大きな土砂災害が起こった。近くに住んでいた私は、友人と共にスコップを持ち土砂を撤去するために連日被災地へと通った。

その後、熊本大地震が発生し、この時のノウハウが役に立つと思い、熊本に向かった。現地で仲間を集めチームを結成し、継続的な支援活動を開始した。

2018年には再び広島で大雨による土砂災害が発生し、広範囲にわたる支援活動を行った。それからたくさんの被災地へと向かい、活動を継続した。

災害はなぜ発生するのだろう。災害は人を苦しめるために起こるのではなく、地球がバランスをとるために起こる。人が風邪をひいてくしゃみするのと同じようなものだと、そう考えている。

人間は、自らの贅沢なライフスタイルのために自然を破壊しすぎた。国土の67%が森林だと言われているが、八百万の神がいるとされ、多様な動植物が共存できる「森」は7%しか残っていないと言う。残りの60%は林である。

林とは、光を通さず、微生物が生きていけない場所である。明治になるまで、日本は１種類も動物が絶滅しなかった国である。それは、森を守ってきたからだ。便利を排除してまでも、森を守り、自然と人間の生きる場を棲み分けしてきた。

近代では、経済を最優先とし、便利を求め、たくさんの生物を殺してきた。そのバランスを保つために、地球は人を殺すほどの風を吹かせるのである。

では、私たちが人間だけでなく、すべての命と共存し、働き方の方向性を変えていけば、未来の子供達には、もっと優しい風の吹く地球を残せるのではないだろうか。

今私達に何ができるだろう。考えてみる。森を守るために、組織を作って国に働きかける団体がある。影響力を持つために、巨大な組織にしたいのだ。

でもそれは、山に一本立派な木があるようなもの。商店街が無くなり、大きな商業施設ができるようなもの。組織は世界を良くしない。世界を良くするのはコミュニティだ。

多様な生命が共存する森のように、私たちも違いを良しとし、活かし合い、傷つけず、奪わず。16.000年続いた縄文時代の遺跡では、唯一武器が見つかっていないという。最も人が正しく生きた時代なんじゃないだろうか。

活かし合い、傷つけず、奪わず。そして正直に。

○ 広島の復興の軌跡・人物編（最終回）　広島復興の過程に関与した外国人たち
～PART2　書簡のやり取りを通して～

本号が最終回ということで総括しようと思ったが、いざ執筆に臨んでみるといろいろな思いが去来･交錯して、前回の続きをもう少し書いてみたいとの思いが募ってきた。というのも、その最も強い動機は外国人から送られてきた多くの書簡のやりとりがあったことである。実は復興研究の過程で何か新たな情報があるかもしれないと、広島の復興に関与した外国人に質問を兼ねた書簡を送り、やりとりをしたことがあった。そのことについて思い出して少し報告しよう。(敬称略)

１．S.A.ジャビー（当時豪州軍准将）

まず空振りの報告である。私は広島の復興計画の研究を始めたのは 1978 年（昭和 53 年）であったが、その頃広島市役所の「渉外課」というところを訪ねて、S.A.ジャビーのことについて資料を求めたところ、帰国後の住所がオーストラリア・シドニー・アータモン（番地付）ということだけが判明した。そこですぐさまいくつかの質問を記した書簡を送ったが、結局返信はなかった。

復興顧問のジャビーは、既報ですでに述べたところであるが、当時の新聞でもたびたび登場し、復興顧問の枠組みを超えた関りを示したことで有名であった。早くから被爆建物の保存を訴えたり、丹下健三とも議論を交わしたりしていた。とりわけ平和記念公園設計コンペを想定してのデザイン論争はよく知られており、ジャビーは日本的な様式の五重塔を推薦したとされる。また土地区画整理の設計として白島地区に取り組み、キャンベラをモデルとした曲線状の区画整理案を示したのである。ややおせっかい、あるいは押し付け的な傾向があり、悪意はなかったが、広島市の業務担当者を困惑させたことも伝説となっていた人物である。

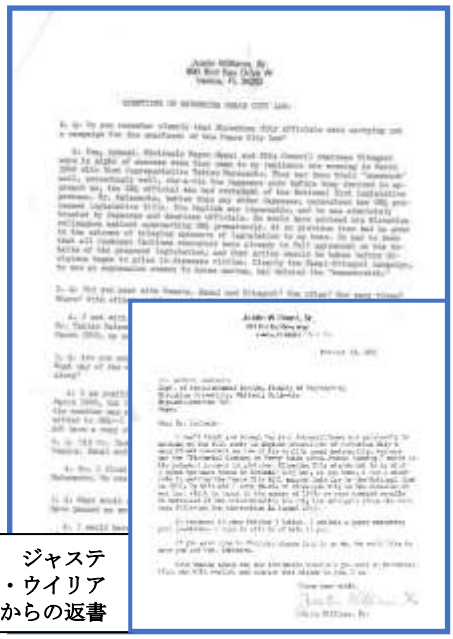
その後、被爆 50 周年に関連して私にオーストラリア訪問の機会が与えられたので、1994 年に現地に赴いた（メルボルンでは日本人と結婚した旧オーストラリア兵を訪ねたりした)。そして確かに、記されていたアータモンの場所に辿り着いたが、そこには建物は何もなく、ジャビーに関して手がかりは得られなかった（そのとき周りの人にもう少し聞きまわってみればよかったのではないかという反省がある)。

広島に対して多くの提案を頂いたジャビーであるが（既報参照されたい)、退役し帰国すれば、ある時期まで確かにクリスマスカードが届いていたという情報もあったが、それに返信しないでいるうちに連絡が途絶したということになる。広島市の機構改革等があれば、当時の関係者はいなくなり、連絡不通となるであろう。復興期を過ぎれば、ある時期の外国人との付き合いは自然消滅ということであった。それが広島市の実態である。

２．ジャスティン・ウイリアムス（ＧＨＱ国会課長）

平和都市法制定において決定的な役割を果したジャスティン・ウイリアムスであるが、彼とは多くの手紙のやりとりをした。特に当初 1987 年 9 月における質問（浜井信三市長さんや広島市議会議長であった任都栗司さんと度々会われましたか）にその回答を紹介しよう。

Do you remember clearly that Hiroshima City officials were carrying out a campaign for the enactment of the Peace City Law? と問いかけると、ウイリアムスさんは 1987 年 10 月 13 日付の返書で、明確に覚えていてその記憶に基づいて回答している。特に質問２に対して「私は浜井市長と任都栗さん、そして松本滝蔵さんとも、２回会いました、彼らとの最初の会見は、1949 年 3 月のある夕刻、私の自宅で、そして 2 度目はその 2 日後、第一生命ビルのＧＨＱのオフィスでと記述し、また別記でマッカーサー元帥と任都栗との会見については明確に否定している。このように明確な回答をしてきているのである。これらのことは、すでに明らかになっていることの傍証といえるが、平和都市法制定過程を明らかにするものである。



資料　ジャスティン・ウイリアムスからの返書

３．クロフォード・サムス[1] 准将やジョン・D・モンゴメリーとのやり取り

サムス准将であるが、公衆衛生担当のＧＨＱ局長とされ、私と何通もの書簡をやり取りした。ＡＢＣＣ設置・建設に関して、度々広島を訪問しており、新聞にもたびたび登場している。いつ広島訪問し、どのような折衝をしたかということでは、いくつかの懸案が残されており、ここでは省略するが、当時の新聞記事と照合すれば、ある回答が導かれるかもしれない。どなたか改めて追求していただければ、私が所有している情報・資料はすべて提供するつもりである。

モンゴメリーについては既に記述したように、度々広島訪問をしているのに、広島でなしたことへの応答が充分になされなかった。モンゴメリーの一番気にしていたことは自分が果たしたことの意味、とりわけ役に立ったかどうか、効果があったかということであった。被爆建物保存に関しては時代を先んじての提案であったことを伝えておいたので、満足したことであろう。しかし、日本の都市計画制度や復興事業の仕組み、政治体制等への理解は必ずしも十分でなかったので、復興を戦略的に進めることには寄与できなかった。

４．まとめにかえて

やはり復興に関係した外国人へのアフターフォローは十分でなかったことが指摘できる。

広島で一定の貢献があったのに、離任後は連絡も取らず、ましてや帰国後は放置している場合が多かったようである。それが機構改革等によって担当者の交代があったりして、クリスマスカードなど季節の挨拶があっても放置していたようである。一定期間、広島の報告をするような対応が必要であったといえるであろう。

今気づくことは、かつて広島が受けた他国からの支援に十分に応えてきたか、応えているであろうかという問題である。ウクライナの復興においても、日本はどの様な関与をすればよいのであろうかという問いがある。地理的な問題もあり、十分な対応はできないであろうが、また過剰なおせっかいは必要ないが、少なくともなにが可能か、広島の役割に気付くべきであろう。

今後の復興問題に応えるためにも、かつての復興への追跡研究、新たな問題からの情報収集などを進め、復興資料館と復興研究所が一体となった施設・運営・システムの整備が必要である。資料館と研究所があってこそ研修も成り立つのである。広島で復興について学びたいといわれ、旧来の知識を、しかもテキストを読むような研修だけでは全く十分とは言えない。改めて気づくことは広島は復興に関してあまり情報が更新されておらず、研究も深まっていないことである。常に現代的な問題への対応をしていなければ、過去の経験も生かされないと考えなければならないのである。

脚注：１）ＧＨＱにおいて公衆衛生局長として赴任し、占領期の医療改革を担当し、ＤＤＴ散布を進めたことで有名。広島でＡＢＣＣの設置、建設に関わった。Ｃ．Ｆ.サムス著・竹前英治編訳：ＤＤＴ革命（岩波書店、1986）参照

（編集委員　石丸紀興）

□ 特別寄稿

「住民訴訟」に取り組んで

前 広島市議会議員　馬庭 恭子

議員として、行政監視を怠らず、市民の財産を守っていくことはとても重要なことです。それを「前例主義だ、慣例だ」とゆるい判断のもと、市政をすすめ、将来を考えず、税金を先送りしながら、支出することを許していくと危機状況が生まれます。

以前、北海道の夕張市が財政再建団体に転落したことは衝撃的な出来事でした。市政運営のかじ取り、議員の監視能力が欠けると病院閉鎖、学校統合、各福祉サービス低下はじめ、すべての市民生活は生涯にわたって多大な影響を受けます。

令和４年度の広島市の決算状況をみると財政力指数は1.0をしたまわる0.796、政令指定都市のなかで、財政悪化が報道される京都市に逆転され、20都市順位では13位、さらに将来負担比率164.8%は20都市中なんと最下位となっています。そのような状況になっていることは、広島市の広報紙「市民と市政」にも掲載されてはいません。市民には知らされてはいないし、議員のなかでも財政に関心がある議員は少数です。

市長が提案してくる議案のなかで特に注意をはらっていくのは、契約の締結、債務負担行為など大きな金額が提示される時です。その案件に係る担当者から情報収集し、資料をまとめ、さらに聞き取りを行い、なぜそう決定したのか、その根拠はどこからくるのか、他都市や他事例との比較など様々な角度から練って、議論の遡上にのせ、議決判断へとむすびつけていくことが議員の仕事です。

そのなかでそれはあり得ない、つまり、市民の税金の不適切な使用、あるいは無駄でしかないという案件がたくさんあります。しかし、修正案を提出しても市長与党に可決されてしまえば、それで終了となってしまうのです。

しかし、なおかつ、「それはやっぱり、納得できない」、「法にふれるのではないか」、「不当なのではないか」「是正すべきだ」と訴えつづけるための手段として、「地方自治法」で定められている「**住民監査請求**」と「**住民訴訟**」があります。

まず、「**住民監査請求**」は、広島市民であれば、誰でも請求できます。広島市の執行機関や職員が違法、または不当な財務会計上の行為を発見した場合、これらを証する書面を添えて、監査委員に提出するということになっています。

注意点として、その行為があった日、終わった日から１年経過した案件は請求の対象ではないということに気をつけないとなりません。この１年は、時間が十分にあるようで、実は短く、証する書面を手に入れるのに時間がかかるのです。

つまり、必要な書面が議員を含めて、市民が情報公開請求するにも２週間要すること、開示されても黒塗りになっていること、不開示になったり、不存在となることもあります。情報を集め、考えていくなか、追加資料を求めたり、類似案件を他都市から取り寄せたりなどしていると時間はあっという間に過ぎていきます。当たり前だと思うのですが、十分な時間配分をしながら、計画をたてて、詰めていくことが肝心です。

つまり、「住民監査請求」をすることはたやすいことではありませんが、用意周到に計画を立てていけばやれます。この「住民監査請求」は広島市の監査委員（議員２人、弁護士１人、市職員１人の４人構成）に請求し、監査するにあたって、内容が監査に値しないとなれば、却下され、監査に値するとされ、監査されれば、60 日以内にその監査結果が明らかにされ、請求はそのような事実はないとして棄却されるか、確かにその事実が認められると返還命令がくだります。

「**住民訴訟**」は、この「住民監査請求をした住民」が、監査結果に不服があれば、裁判所に「住民訴訟」ができることになっています。ただし、違法なものにかぎられるとされ、「住民監査請求の結果」がでてから、出訴期間が 30 日以内という決まりがあります。

さて、今回の広島商工会議所と市営駐車場の財産交換については、財産交換自体の違法性や不当性を問うことは、不動産鑑定書はじめ様々な書類が提出されるのに時間がかかり、超速で証する書面を作成しても、その行為があった日（2021 年８月１日）から１年過ぎている（2022 年７月 31 日で１年）ということ、一度行われた不動産鑑定の鑑定はくつがえすことには相当の詰めを行わないとできないことで住民監査請求も住民訴訟も困難とし、見送ったのです。

なんといっても、水面下で動き、わからないように辻褄あわせをしている書類を見つけ出しながら、そこに問題を発見し、質していくには時間は相当かかるということが反省点です。

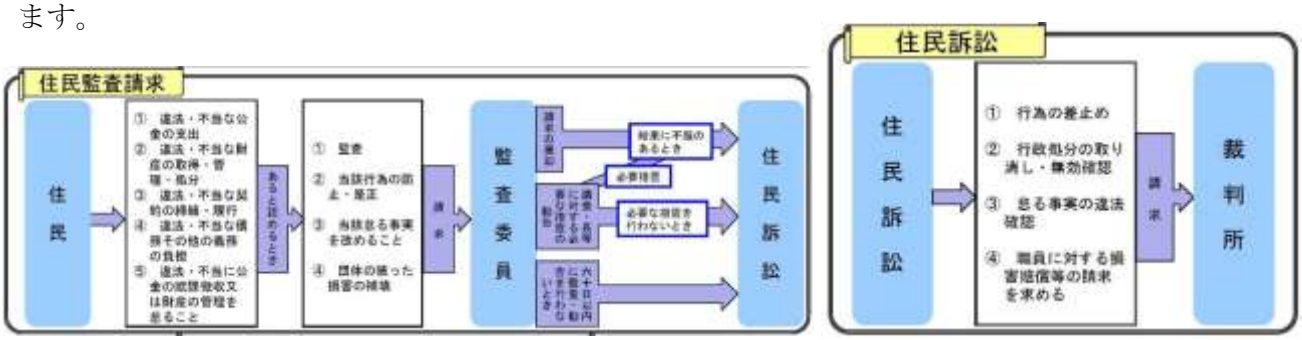
しかし、この財産交換、どう考えても納得がいかない。商工会議所より、価値の高い市営駐車場を再開発事業前に交換し、市民の財産を目減りさせていることを市民に伝えたい、明らかにできることは明らかにしておきたいという一念で、現在も続いているこの財産交換に伴ったビル賃料、ビル管理の随意契約による委託を問題として損害賠償を軸に訴えようと動きました。

まず、住民監査請求を行い、2023 年６月 30 日に棄却されたため、住民訴訟として訴状を作成することにしたのです。訴状作成にあたっては、いままで情報収集した資料をもとにひとつひとつ法律に照らし合わせながら、弁護士と作成していきました。

結果、１カ月以内のルールで、2023 年７月 28 日に訴状を提出できました。住民訴訟は、民衆訴訟とよばれ、個人の利益のために裁判するのではないということで、私が勝訴すれば、被告側（松井市長、局長２人）がその損害額を自腹！で支払わなくてはなりません。

また、裁判のかかった費用も私に戻ってくる仕組みになっています。たとえ、敗訴しても、私が失うものは 25 万円の裁判費用のみです。

最後になりますが、私を議員として、市民代理人として送り出してくださった皆さまに感謝します。



住民監査請求制度・住民訴訟制度の手続き上の流れ（総務省資料より）

○ メルマガ「まちづくりひろしま」を総括する

今号でメルマガも一休みするので、これまでの記事内容を簡潔に総括しておきたい。

１．巻頭言編（＊リンク参照）

これまで編集委員を中心にして 29 名の方に執筆いただいた。大学教授などの知識人からまちづくりに関わる市民団体の代表など、幅広い人たちである。こちらからテーマをお願いした場合もあるし、時代を先読みされて自主的に書かれたケースも多い。

中でも平岡敬元広島市長の 5 回目（メルマガ 32 号・平成 29 年 11 月 15 日）は、最後の原稿依頼として今現在、広島市民に最も訴えたいことを書いてほしいとお願いした。それが、『「ヒロシマ」の再生を考える』（＊リンク参照）であり、今でも立派に通用する内容なので、是非一読願いたい。

２．広島の復興の軌跡編、同・人物編（＊リンク参照）

広島のまちづくりを考えるうえで、その町の歴史を知ることが基本である。まずは被爆後の廃墟からいかにして復興の道をたどったかをハード面と人物面に的を絞って紹介。

ハード面は、平和記念公園や平和大通り等の新たなまちづくりから、被爆建物等の歴史をたどり現在の状況や保存・活用等の事例を紹介。

人物編は、戦後の歴代市長や市議会議員等の政治家、国・県・市の行政の人たち、ＧＨＱ等の広島のまちづくりに関わった外国人、都市計画に携わった人たち（特に丹下健三）の紹介。

3．広島市中央公園構想編（＊リンク参照）

市民からの「アイデアコンペの中からの提案」（＊リンク参照）と日本建築家協会中国支部メンバーによる「ひろしま市民ひろばの提案」（＊リンク参照）を含めて、いろいろな組織や立場で中央公園の在り方が検討されており、それらの提言を紹介。

中でも、当時広島大学准教授の千代章一郎先生が書かれた『丹下健三による「広島計画」』（第３４号）（＊リンク参照）は秀逸である。

４．人物登場編（＊リンク参照）

広島のまちを良くしようと日々努力している人たちを応援するために、まちづくりに寄与している団体や人物に登場してもらい、活動内容や抱負等を紹介。

５．こまちなみ編（＊リンク参照）

金沢市はまちの歴史を色濃く残した風格のある町並みを「こまちなみ」と称して守り、育て、生かしたまちづくりを進めている。それに倣って、広島における「こまちなみ」を探訪し、 シリーズで紹介。

６．講演会など編（＊リンク参照）

編集委員の石丸紀興氏が主催する「時代を語り建築を語る会」シリーズを始め、各界で活躍されている人たちが登壇するシンポジウムや講演会、被服支廠の保存・活用等をテーマにした「Hihukusho ラジオ」や広島県主催の「被服支廠の活用ワークショップ」などの紹介。

・時代を語り建築を語る会

「時代を語り建築を語る会」は全 35 回開催されているが、そのうち 33 回掲載。石丸氏の専門分野の建築やまちづくりの分野から文学や歴史、平和運動や核問題の専門家、報道関係者等、石丸氏の幅広い人脈から選ばれた人が登場し、二人の問答形式を中心とした会である。

・講演会

まちづくりや建築に関連した行政や学会等の主催するシンポジウムから「図書館移転問題」を考える討論会、Ｇ７広島サミット関連のイベントなど、多彩な内容である。

・Hihukusho ラジオ

旧陸軍被服支廠の保存・活用の動きをサポートするためインターネット配信されている Hihukusyo ラジオに登場している人の話の概要を紹介。

・被服支廠の活用ワークショップ

広島県が被服支廠の活用策を考える有識者懇談会の傘下に、市民から幅広いアイデアを募るためワークショップを開催。ワークショップ参加者がその内容と自分のコメントを紹介。

７．ほっとコーナー編（＊リンク参照）

まちづくりの硬い話から離れて、読者にほっと一息ついていただくコーナー。バトンタッチ形式で多くの人に身近な話題を自由に書いていただいた。

○ *HACK便り*

これまで、そしてこれから

ＨＡＣＫ代表　桧山　渉

ひろしままちづくりHACKとしての活動は2019.7から始まった。今年2023.7で4年になる。といってもコロナ禍を経ていることもあり、大々的な活動ができているわけではない。

2019年10月にイノベーション・ハブ・ひろしまCampsでキックオフイベントを開催、2021年にHPを開設してまちづくりに関わるトピックを掲載しはじめ、2022年11月には**『ひろしままちづくりHACK「知る」写真展』**をUnitéで開催、2022年10月よりPort.cloud（商工会議所9Ｆの都市のまちづくりスペース）にて**「都市計画を学ぼう！」**というイベントを月一で開催している。

HACKの最終的な目的は「**ひろしまの様々なまちづくり団体のHub（様々な団体などをつなぎ交流を促す役割。以下「ハブ」という）として活躍できるようになること**」であり、少人数ながらできる範囲で、ゆっくりと地道に活動している。

現在のメンバーは6人である。建築、都市計画に関わるものが2人、アート系が3人、ライターが1人、それぞれが何かしらのまちづくりに関わっていることもあり、個人の動きや仲間内の知りたいことなどがHACKの活動に繋がっていくことも多い。

現在、Port.cloudで行っている「**都市計画を学ぼう！**」のイベントも、「**そもそも都市計画ってなに？**」など、HACKメンバーから都市計画に関する質問をいろいろと受け続けたことが始まりである。もしかしたら、こういったことを知りたい人は結構いるのではないか、と思い、仲間の薦めもあり始めるにいたった。現在10回を越え、ワークショップとしては、法定計画や各種法令についての若干とっつきにくいものから、地図を眺めながら、ここでこんなことができたら面白そうという理想を実現するためにどんなことを考えなければならないかというゲーム感覚で行うものまで、いろいろなテーマで行っている。

ただ、このイベントの大きな目的の一つは、まち住む一人ひとりが「**まちを知ろう**」とすること、そしてその際に「**都市計画**」について知っていることが、まちの動きを知ることに役立つということを知ってもらうことにある。

参加してくださっている方は様々で、まちづくり団体等に参加している方だけでなく、普通にテーマや内容に興味を持ってくださった方、なかには中学生や高校生もいるが、回を続けていくにつれ、なんとなく「まちを知ろう」という意識を持つことはじんわり広まってきているような気はしている。

もう一つの目的は、知識のあるなしに関係なく、年齢も経歴も関係なく、参加したいときに参加してまちの気になることについて自由に話ができる場所をつくることにある。そんな場所が、まちに一つくらいあってもいいじゃないかと思っている。この場所づくりは、HACKの本来の目的、ひろしまの様々なまちづくり団体のハブになることにつながるのではないかと考えている。

自分自身もすべて把握しているわけではないが、広島で何かしらまちづくりに関わっている団体はひじょうに多い。そして各団体の中の個人個人が、別の団体の個人個人と知り合いである、というのはよく目にする状況である。しかしながら、団体同士が連携して何かを行うということは、あまり多くないように思える。これは非常にもったいないことではないだろうか。もちろん、団体の性格や規模で難しいこともあるだろうが、がっぷり四つに組まなくても、ゆるいつながりでも実施できるようなことはたくさんあると思われる。

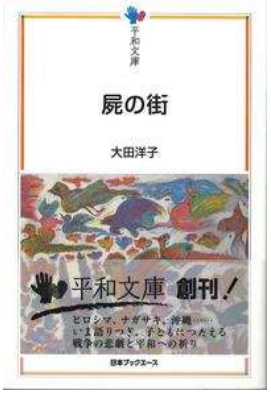
現在、「**都市計画を学ぼう！**」を契機に、そのゆるいつながりで実施しようという取組みが動き始めている。ここで詳細を詳しく述べることはできないが、始まれば大きな動きになっていくかもしれない。興味のある方は「**都市計画を学ぼう！**」に参加してみていただきたい。

今後の目標としては、こういった取組みをマネタイズできる人、団体等を仲間にしたいと思っている、そういった人と活動ができれば、少なくとも活動費を確保できることに繋がるだろうし、もしかしたら現在本業とは別に活動していることを、もう一つの仕事とすることも可能となり、まちづくりに関われる人がより多くなるかもしれない。

人口減少が進む社会では、いくつかの異なる仕事を持つことが必要であり、当たり前になってくるのではないだろうか。そして、現在多く見られる、まちづくりに関わる取組みが持ち出しやボランティアで成り立つものではなく、仕事として成立し、まちづくり活動が「**やりたい仕事**」として定着していくような流れの一旦になれば幸いである。

○ *本「屍の街」の紹介*

著者：大田洋子



広島文学資料保全の会は、原爆文学を**ユネスコ「世界の記憶」**に申請するため、峠三吉「原爆詩集」（最終稿）、原民喜「原爆被災時の手帳」、栗原貞子「生ましめん哉　原子爆弾秘話」のほか、新たに大田洋子「屍の街」の初稿原稿を加えている。

原爆文学に馴染みが薄かったので読んでみた。この本は被爆直後から数か月の変わりゆく広島のまちの姿を作家の冷徹な目でとらえたルポルタージュである。特に、8 月 6 日から 3 日間、河原で野宿した情景描写は読み手の想像力を掻き立て、写真や絵で見るより訴える力が大きい。

筆者は 1903 年（明治 36 年）、広島県生まれ。小説家として上京したが、東京空襲を逃れるため母と妹が住む広島市白島九軒町へ疎開し、そこで被爆した。

8 月 6 日の朝、8 時 15 分、2 階の寝床で熟睡中、「*海の底で稲妻に似た青い光につつまれたような夢を見た・・・するとすぐ、大地を震わせるような・・・雷鳴がとどろきわたるかと思うような・・・音響につれて・・・家の屋根が烈しい勢いで落ちかかって来た。気がついたとき、私は微塵に砕けた壁土の煙の中にぼんやり佇んでいた。*」と記している。また階下で食事中の母は 2 階から「*きゃっと叫んだような声*」を聞いたが、本人は記憶がない。

周囲の被爆の惨状を時間経過と共に淡々と、しかも豊饒な文章で著しているので、読者も引き込まれて追体験している感じだ。

さらに被爆後の描写だけでなく、戦前の広島の日常風景や全国の各都市が空襲に遭っているのになぜ広島にはそれがないのか巷のうわさ話等が紹介されていて興味深い。

また当時の新聞に掲載された放射能の研究者・医師たちの学術的な話や連合国側の調査団の話など、客観的な情報も盛り込まれているので、資料としても参考になる。

周りの人が次々に亡くなっていくなか、自分にも死が迫り、一日も早くこの惨状を書き留めておかなければとせかされるように書き始め、その年の 11 月に筆を置く。ただ、連合国のプレスコード（言論統制）の下、多くの制約を受けながら 3 年後、やっと 1948 年に出版。

軍国主義者たちが悪あがきしなければ戦争はすでに終結しており、原爆を投下した責任はアメリカにあると共に日本の軍閥政治にあると断じ、筆者は「*この一冊の本を書く意味は・・・日本をほんとうの平和にするためのものであってほしい。*」と綴っている。

この本は広島県人にとって必読の書であり、多くの人に読んでほしい。また、「**世界の記憶**」に申請中だが、その価値は十分にあり、世界の人たちの目に届くことを希う。

（編集委員　瀧口信二）

注）定価：1.100 円、出版社：日本ブックサービス〈平和文庫〉

○ *読者からの投稿*　　第 67 号を読んで思ったこと

中建日報　野村正範

「広島の街は美しい」という点について、確かにそうでもあるし、発展性に魅力的な乏しさを感じる。私は広島に住んで 40 数年となるが、その間、仕事の関係やアトピー肌に苦しむ息子のために引越しを 7 回も経験した。市内中心地に近い長寿園や観音等で生活し、今は郊外の団地住まいだが、当然、周りの景色は緑が少ない。

しかし、世の中は人口が減少化し脱炭素社会の具現化で、環境に配慮した街づくりが美観を整えつつある。その一方、これまで建築確認の記事等の建設関係の仕事に携わり、インタビューでは数百人の囲み記事や街づくりの座談会も手掛けてきた。本音の面白い話も書けず苦労もあったが、それも年内で終わる。創造の世界に生きる人間として 2 重の寂しさが込み上がる。

やはり、建物は保存よりは建替えの方が波及効果が大きい。例えば、現存する国内最大級の被爆建物広島陸軍被服支廠は重要文化財級の価値があると言われ、保存する方向で活用策も話し合われているが、非常に気にかかるところ。

学生時代、数少ない知り合いの女性が薫風寮に住んでいて、夜間、バスケット同好会のマネージャーをしていたことを思い出す。

最後に、土屋時子さんとは縁があって月曜会の芝居でお会いしてたこともあり、懐かしい思い出とこれからの健康に気を付けたい。

□ 編集後記

メルマガの編集に携わって

2ヶ月ごとにメルマガを配信して今号で68回目を迎えた。ボランティア精神で**よくぞ！**ここまでたどり着いたものと感心している。特に、無償で原稿を書いていただいた多くの皆様には**感謝！感謝！**の気持ちで一杯だ。

ただ、編集委員の大半が後期高齢者となり、それぞれにガタがきて感度が鈍ってきたこともあり、今号で一旦休止することになった。若い世代が新しい形で、**ひろしまのまちを良くしよう！**という、このメルマガの精神を継承してもらえれば幸いである。

この期間を振り返って一番印象に残るのは、ちょうど1年前の第62号で「**広島中央公園の建ぺい率問題を問う**」を寄稿し、配信後に削除したことである。市が法律違反をしている可能性があるのでは？と思い書いたが、市はこっそり建ぺい率の上限を引き上げていた。中央公園の将来像が見えないまま、パークPFIで民間施設等をどんどん建て、老朽化した青少年センターと中央図書館・映像文化ライブラリーは解体して建ぺい率を低下させ、一方で音楽ホールを新築するという筋書きを描いているようだ。

2011年に中央公園の在り方を求めたアイデアコンペを市民サイドで実施し、そのフォローとしてこのメルマガを配信してきたが、中央公園が一気に変な方向に進んでいく姿を追う羽目になった。そのきっかけは十分な事前調査も検討もせず、唐突にサッカースタジアムの建設を決め、障害をごり押ししながら完成にまい進したことである。

建設に反対した隣接の市営住宅の住民の要望に応えてか、新たに近場の県営住宅跡地で市営住宅の建て替えが進められているが、平和記念公園と中央公園及び基町高層団地が誕生した歴史を知れば、老朽化した市営住宅は公園に戻すのが筋である。まちの一等地にある国有地は広く市民に開放されるべきであり、一部市民に限定された利用は愚策としか言いようがない。

メルマガのメインテーマでもあった中央公園が先行き不透明なままメルマガを閉じるのは残念至極だが、できれば別の形で追っていきたいと思う。

このメルマガは一般読者のほかに広島市の関係部署や一部の市議会議員、マスコミ等にも配信してきた。特に、中央公園関連の問題は市長に向かって発信したが、どこまで届いたであろう？支援者である経済界の声を優先し、市民の声にそっぽを向いているようではそのうちしっぺ返しが来るものと思う。

最近、ジャニーズ問題が大きく取り上げられ、マスコミは性加害を知りながらジャニーズ事務所に忖度していたことを自己批判しているが、マスコミは不正を正し、正義を応援すべきだ。

最後に、2012年９月創刊以来11年間に亘り配信してきましたが、本号をもって休まさせていただくことになりました。長らくご愛顧いただいた読者の皆様にはお礼を申し上げます。

特に、ひろしまの街を愛する編集委員並びに同様の心を持たれた多くの筆者たちから紙面を快く飾っていただいたことに心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

（編集委員　瀧口信二）

＊メルマガを読まれての感想や質問及びひろしまのまちづくりについて皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください！

（投稿は５００字程度でお願いします）

編集委員

石丸紀興　広島諸事・地域再生研究所主宰
瀧口信二　広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷　章　ガリバープロダクツ代表
前岡智之　中国セントラルコンサルタント代表